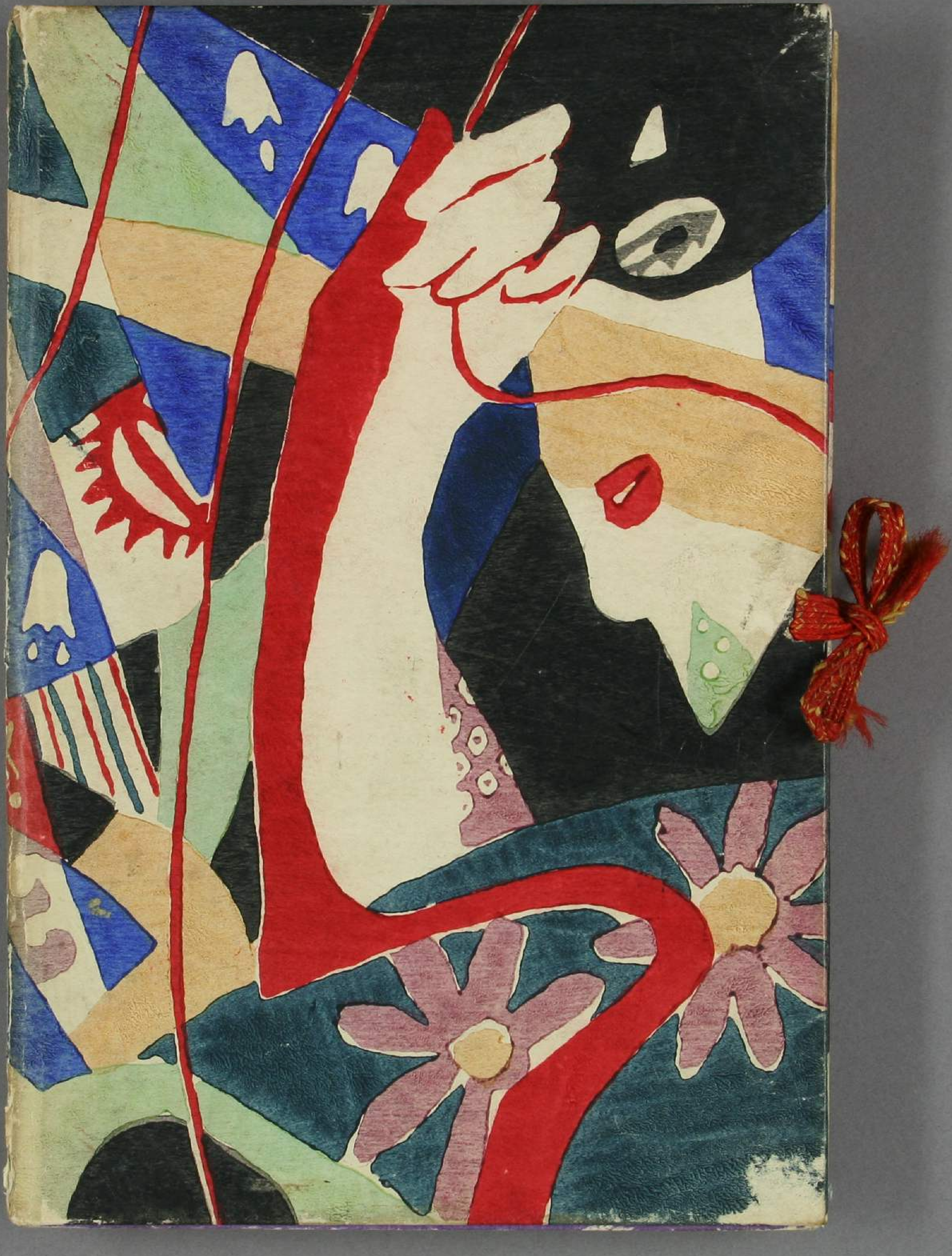
SAMISEN
GUSA

繪入
小唄集

三味線草

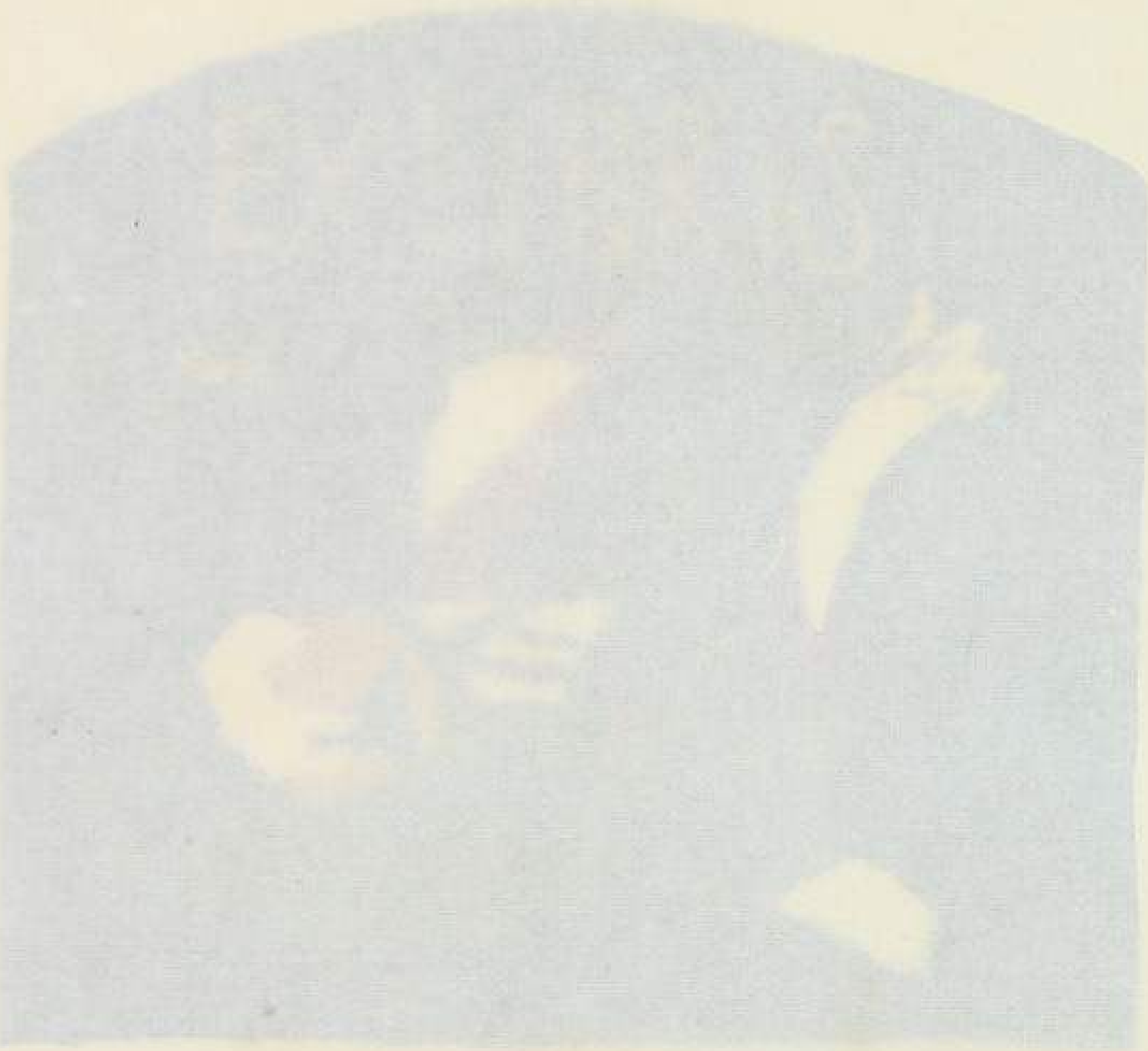
夢二作



三味線草

繪入小唄集

三味線草

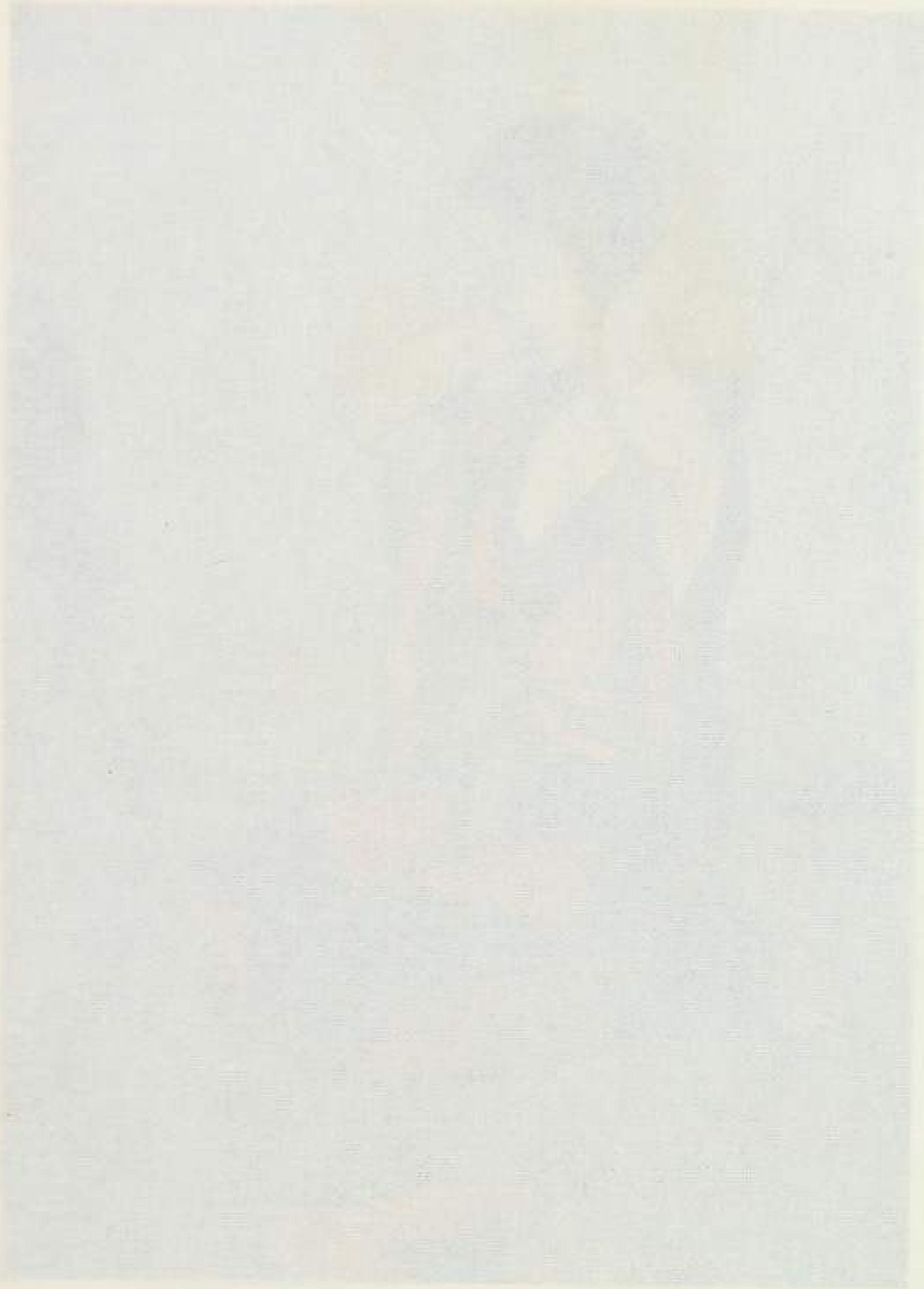


三家雜草

EX·LIBRIS

この一巻を櫻さく三味線の國のムスメたちにおくる。あはれわがムスメたちよ。騎士(ナイト)のためならずは、ゆめ〳〵歌ふことなかれ。

TO



三味線草

忘草とて三味線ひけど
あの夜の唄のわすられず
つひつまされて泣いたもの
わしぢやないもの絃ぢやもの。

ひとはしらじな
ひとにはつげそ。
帯も、扇も。

月まつ月は　さえもせで
君まつ月は　さゆるよの。

たれもつれなくあたらねど
この夕暮のあぢきなさ。
煙草のけむりのほそ〲と
たまもけぬがにきえゆくも。

いそ〳〵と

格子のそとにしのびよる
浮氣な夜をまたせおき
君は化粧の手をやめて
さしうつむける稼業を
親の因果と誰がしろ。

煙草のけむりが
きれてながれる。
これがわかれか。

色の名もいはぬ〳〵と山吹の
なびくといふも粋のうち
水にながすがわしや氣にかゝる
なにを蛙がくど〳〵と
ほんにをなごといふものは
やるせないものでござんすわいのう。

たゞおいて霜にうたせよ、
夜ふけてきたが
にくいほどに。

とつおいつ別れともなき柳かな。
柳をひきてかへらじと……。
そちや泣いてゐやるか。
なんの　柳の露でござんす。

雨のふる夜に
誰ぬれてこその。
たそととがむるは
人ふたりまつ身か。

夕となれば　とぼ〳〵と
人みまほしさにいでゝゆく
うたて心をなんといふ。

かのゆくは雁か鵠か
雁ならばはれやとうく。
雁ならば名のりぞせまし
なほ鵠なりや
はれやとうく。

やな
ぎや

やるせない袖(そで)
よもやにかけて
ひとりぬる夜(よ)の
昨日(きのふ)や今日(けふ)のことかいな。

かねてより　くどき上手としりながら
この手がしめた唐繻子の
いつしかとけてにくらしい。
おきて髱かく黄楊の櫛。
つみなひとぢやえ。

たまさかに
あへばとくまももどかしく
つひときすてた腰紐の
（身をも心もそれさまへ）
ゝ）とよんだが無理かいな。

まどろめば夢にもみるべきに
うつゝなや
戀には眠もあはぬものか。

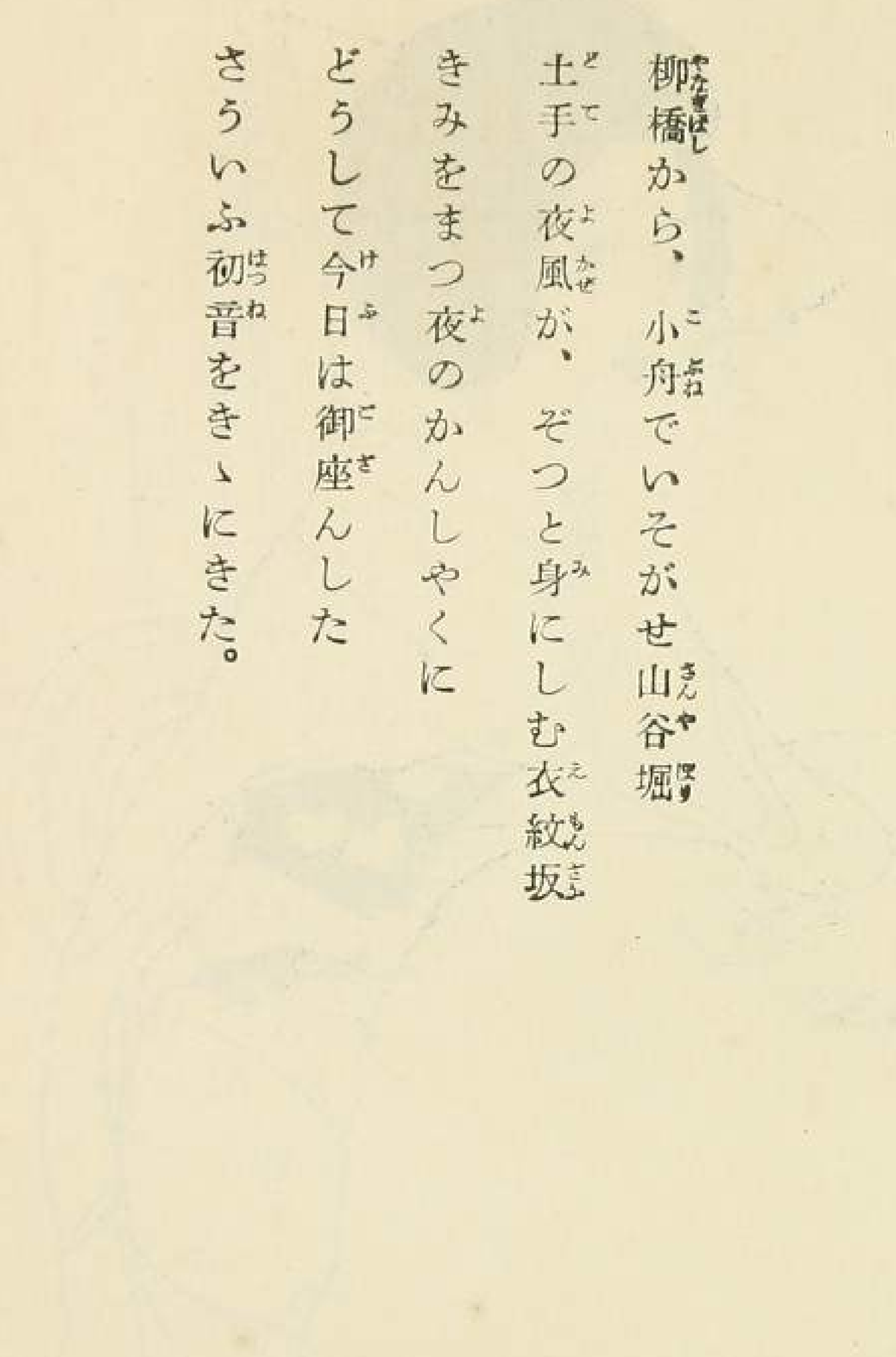
今日のよもやもそらだのめ
夕暮にさへなりにけり。
昔の實の半分も
今もあるならきれてもみせう
なまじ不實があきらめられず。

なにごとも　まはりあはせだ世の中は
一が五になる賽の目も
あの夜のひとの心がはりも。

音なたてそ
宵のねざめの落櫛も
身にしみ〴〵とひゞくもの。

よしや今宵はくもらばくもれ
とても涙でみる月を。

街の柳の
柳の枝に
むすぼれとけぬわがこゝろ
あれ夕風がふくわいの。



柳橋から、小舟でいそがせ山谷堀
土手の夜風が、ぞつと身にしむ衣紋坂
きみをまつ夜のかんしやくに
どうして今日は御座んした
さういふ初音をきゝにきた。

トランプのジヤツク・クヰンの
あふよりも
いつそはかなく
逢うて別れた。

いらぬ煙管の朱羅宇がなごて
様とねた夜のみじかさよ。

まてどくらせど君いでず
日はくれはてゝほのしろき
門のほとり丁子の花よ。

おもふ門には竹うゑて
雪のふりたる曙を
つれなき人にみせばやな
なびく笹の葉。

かけてよいのは衣桁に小袖
かけてたもるなうす情。

ぬれてきた
文箱にそへし杜若
心のいろのみづあさぎ
琴も上手になりて候
戀といふ字に身を堀切の
男ならずば泣かましを。

ねてとけば
まつまもながき晝夜帯
いひたいことの半分も
胸にせまつた朝の鐘
たとへこのまゝ死ぬるとも
明日といふ日がなけりやよい。

翠簾のおもかげものごしに
みそめきゝそめうか〱と
戀をしてやするは人のしらずして
夏痩をするとやれ
すいめさるゝ。

雪の日は
ゆふぐれかけて三味線の
音にこそたてね
しく〱と。

われは菖蒲のねにこそなかめ
ひくな袂のつゆけきに。

そめてくやしきにせ紫や
もとの白地がましぢやもの。

土手にとびかふ夕の螢
おはれ〳〵てちら〳〵と
そつとおさへた團扇の手管。
えゝしよんがえ。

鐘さへなれば
もういなうとおしやる。
こゝは佛法東漸のみなもと
初夜後夜の鐘はいつもなるに。

人目おもはず
人さへしらにや
織つてきせよもの
竪縞を。

もしや薔薇が戀ならば
この身その葉に似もせばや。
もしや小琴が戀ならば
この身は絃とならうもの。

身からでた錆なんとせう。
しんじつかなしとおもへども
しんじつこの身がすてられず。

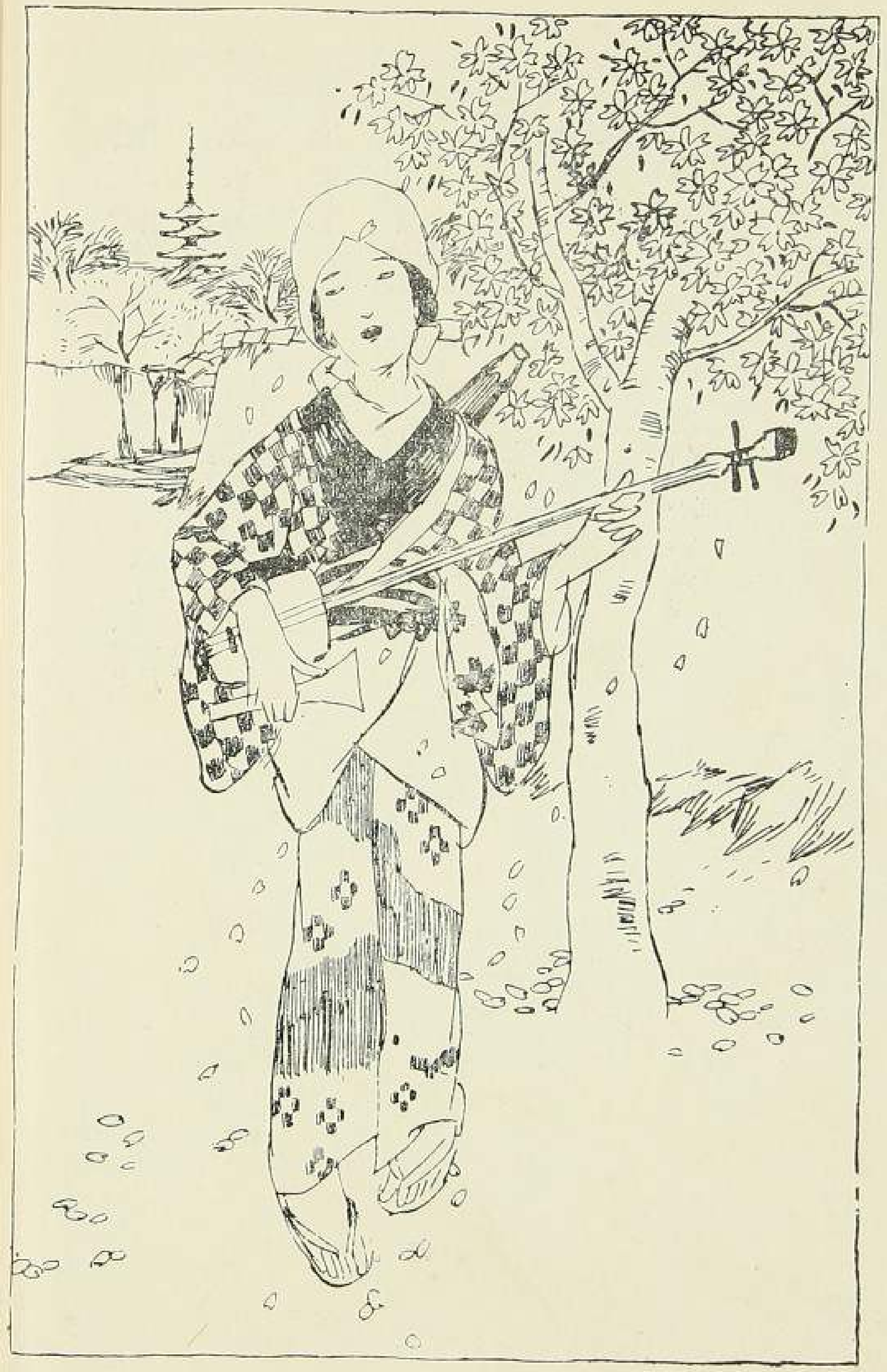
しく〳〵と
泣きながらくる袖萩の
絃のねじめか秋の雨。

ぬるまみの
いとし男をわすれんと、心あまりてねてみても
おほね氣遣ふ片心。
人の前では憎いというて、よそでほめるをきく嬉しさは
櫻ほのめく月影の、夢は浮世の變名ぢやさうな
まようてはさめさめてはいつか、こひしゆかしの思草。

いとゞ名のたつをりふしに
たそや妻戸を
きりぎりす。

桐の雨。かゝりし袖にぬれ乙鳥
あれみやしやんせ鳥でさへ
なれし故郷をふりすてゝ
しらぬ他國でくらうして
やゝをまうけてはる〴〵と
故巣へかへる旅の空
しほらしいではないかいな。

殿と旅すりや月日もわする
鶯なくそな、春ぢやそな。



ゆらり〳〵と浮舟
こべりに繻子のそらどけも
とてもたつ名ぢや流しましよ。

船頭かはいや
音戸の瀬戸で
一丈五尺の艪がしわる。

あはれや
阿武隈に霧たちわたり
あけぬとも夫をばやらじ
まてばすでなしや
あはれや。

あげまきや　とう〳〵
尋(ひろ)ばかりや　とう〳〵
さかりてねたれども
まろびあひけり　とう〳〵
かよひあひけり　とう〳〵。

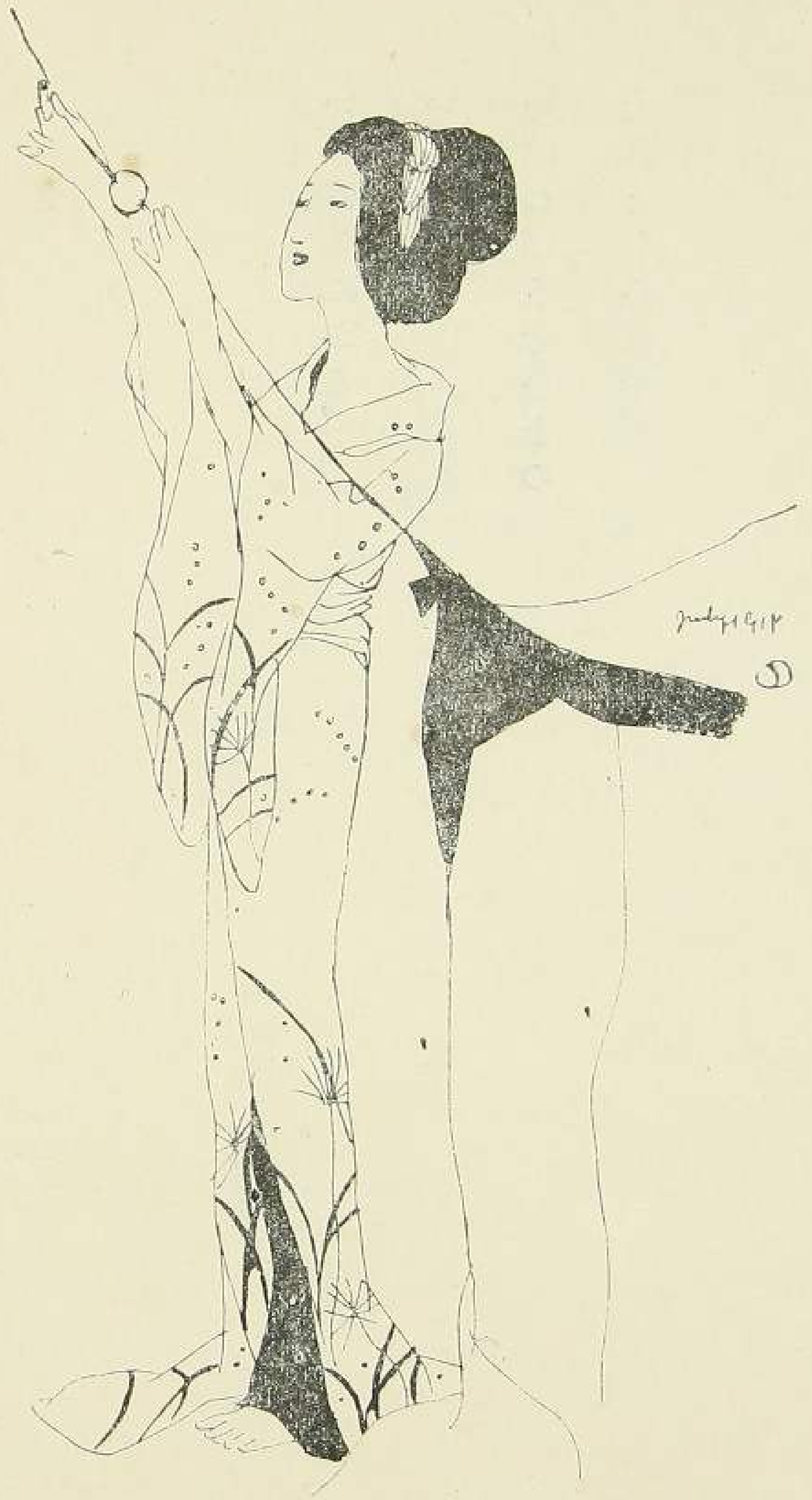
まつとしもなく
それとなく
はかなごゝろに
蟋蟀と泣いてゐました。

とてもたつ名ぢやほどに
こちへお寄りやれのう
柴垣越にものいはう。

しをれがちなる袂かな
川をへだてゝ曲もなや
ゆきゝをしげる渡舟
棹に滴のかず〳〵。

いへば世にふる。
いはねば
いはねばうきひとの
それとしらばや。

深紅島田に
今朝結ふた髪を
様がみだしやる
うれしや様が。



二人ゐてさへさびしいものを
一人でゝきく暮の鐘
死んでしまへとなぜつかぬ。

はれてあへないお前の門へ
はいる燕のにくらしさ。

一人(ひとり)して、むすびし帯(おび)を二人(ふたり)して
といてぬる夜(よ)のみじかさは
いひたいことも紅(くれなゐ)の
帯(おび)よりあけてはづかしや。

あのことも、このことも
逢うていはうとおもひつゝ
さて顔みれば、みなわすれ
なんにもいはずに
ためいきばかり。

ふたりきくともうかるべし
ひとりねてきく　夜の雨。

春の鐘つきわすれたる男かも。
たんなたらりとねりくれば
そろりとなでる鼻のうへ
えゝ、そちやかはいゝ柳ぢやのう。

雨のふる夜のおもひ寝は
いづれ雨とも
涙とも。

こゝは何處ぞと船頭衆にきけば、
こゝは三圍隅田川。

これがいとまの文で候

手にはとらいで

なまなかに。

そなたしのぶと
名もたちて
枕ならぶる
間もなやの。

むかふ通るは清十郎ぢやないか、
笠がようにた菅笠が。

心(こゝろ)いそく飛石(とびいし)づたひ
今帯(いまおび)しめてゆくわいなあ。

うまるゝも、そだちもしらぬ人の子を
いとほしいは
なんの因果その。

きみのこぬとて枕（まくら）ななげそ。
なげそ枕（まくら）に咎（とが）もなや。

おもはゞきみよ
汐ひるまにも
かならず波（なみ）のよるとなく。

枕にかゝる亂髪
いとゞ心の
みだれ〳〵てやるせなや。
よしやこの身が
なんとならうぞの。

ぬれぬさきこそ露をもいとへ
やぶれかぶれの傘のうち
さゝ　なんでもよいわいな。

つれないとおもふほどなほ身にしみ〴〵と
寝ぬ眼にかいたあすの文
鼻毛らしいと心にとうて
いつそ長者になる氣になつて
あへば男の口車。

縁さへあらば
まためぐりも逢ふに
命にさだめがないほどに。

ながれ〳〵て浮川竹の
こゝは梅若隅田川
とても賣られる身ぢやほどに
しづかに漕やれ勘太どの。

昔より今にわたりくる黒船。
縁がつくれば鱶の餌となるもせんなや。
さんたまりや。

さてもそなたの立姿。
春の青柳、糸櫻
こゝろが　たよ〳〵と。

あひにきたれど戸(と)はたゝかれず
唄(うた)の文句(もんく)でさとりやんせ。

たんだひとにはなれまいものよ。
なれてのゝちはるゝんるゝ
身(み)がだいじなるもの
はなるゝがういほどに。

かづいた水(みづ)が
ゆり〱 たぶつき
こぼるゝげなものを
うつゝなや
殿(との)は都(みやこ)に。

やめば　もしやとつひだまされて
えゝもぢれつたい蟲の聲。

濱路ゆきやるは八文字様か
褄がぬれ候　磯風に。

尺八の
一節ぎりこそ音もよけれ
きみと一夜は寝もたらぬ。
あらこゝろなのきみさまや。

逢ふとみし夢はむなしくさめてまた
つらきうつゝの閨のうち
おもうてみてもふさいでも
ほんに心のやるかたもなや。
どうであはれぬ浮世なら
深山のおくのそのおくの
ずつとの奥にすまひして
人目おもはでものおもひたや。

せめて言葉をうらやかにのう。
いまかへるわれに
なんの恨ぞ。

はる〴〵とおくりきて
面影のたつかたみれば
月ほそくのこりたり
心細やの。

そさまおもへば
身がほそる。
三味の棹より身がほそる。

水(みづ)をむすべば月手(つきで)にやどる
花折(はたを)れば香衣(かをりころも)にうつるならひの候もの
袖(そで)をひくにひかれぬは
にくやのふ。

ねたかねなんだか枕にとへば
枕ものいうた
ねたというた。

雨はふるとも雪ふるな
しのぶ細道
竹のたわむに。

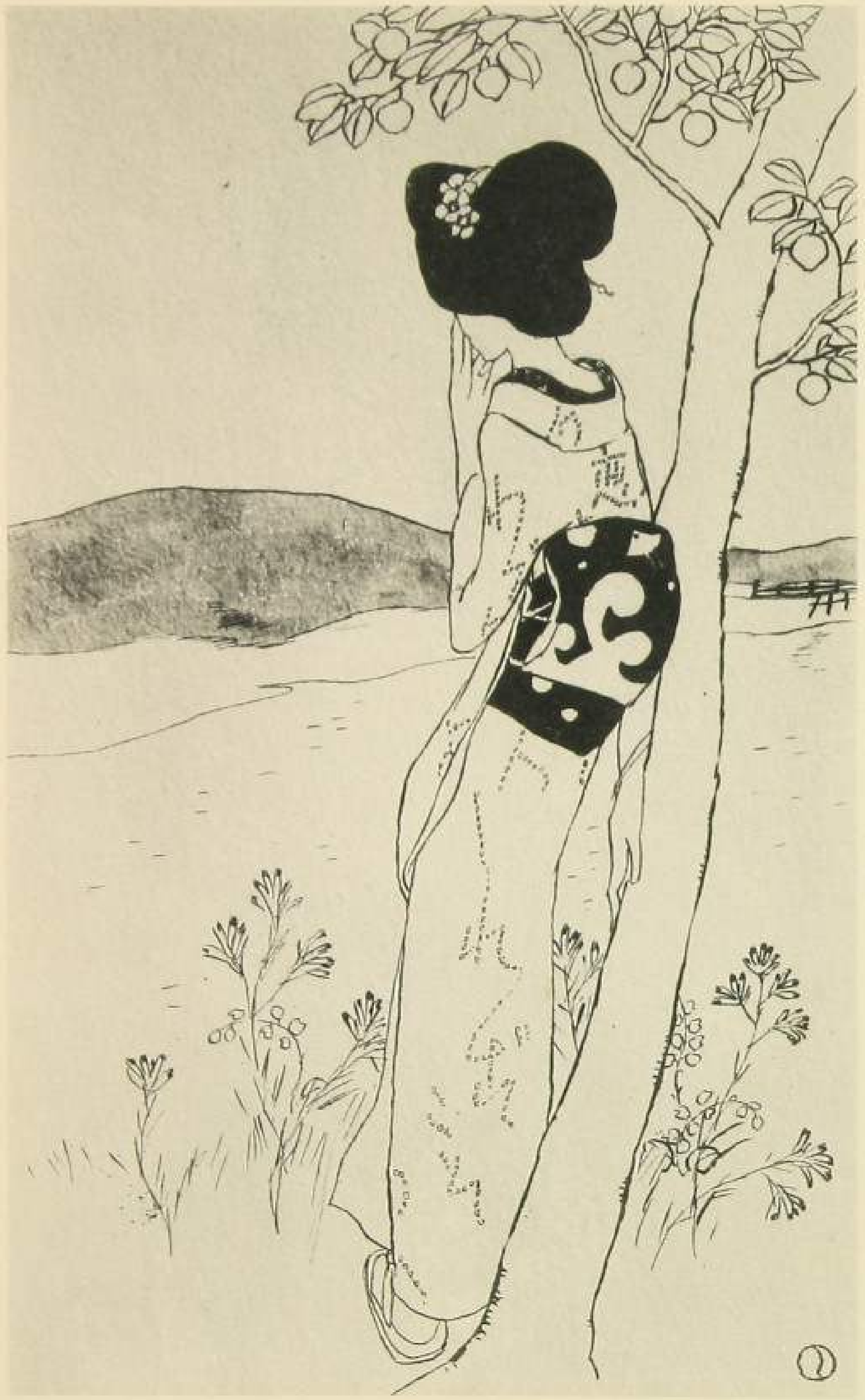
短夜を、まだねもやらでうか〳〵と
ほんにおもへば男氣の、あんまり強い筆の跡。
腹のたつをりかいたのか、様といふ字にねんいれて
慇懃くさいなんぢやいな。それぢやさかいに氣がもめる。
としかはゆく主さんをおもひ〳〵と
心のまゝの世帶なら、主をねかして飯たいて
あれきかしやんせ鶯が、おこしにきたではないかいな。

夢になりとも　逢はせてたもれ。
夢に浮名は——
えゝたつともまゝよ。

まてしばし
硯のなかの薄氷
うちとけてこそ
文もかゝるれ。

のぼりつめたる階子ぢやものを
どうまあこのまゝおりられよう。

一筆まゐらせ文の露、
みか返事か夏蟲か。



山がたかうてあの屋がみえぬ
あの屋かはいや
山にくや。

あさくとも　きよき流の杜若
とんでゆきゝの編笠を
のぞいてみたか濡乙鳥
顔がみたうはないかいな。

月影の
けなばけぬがにたよ〳〵と
憂人のたつ東窓。
あれきかしやんせ後夜の鐘。

逢うてたつ名が
浮名のうちか
あはでたつこそ
浮名なれ。

指(ゆび)をきらうとした剃刀(かみそり)で
けふはうれしうそる眉毛(まゆげ)。

みだれそめてはさてせんもなや。
なれぬ昔に
思案せうずもの。

とけてなよ〳〵したひもの
柳の絲の　みだれ心の
いつわすれうぞ
寝亂髪の　おもかげの。

くる〳〵と
三重の帯さへ一重にも
むすびもはてぬ短夜の
夢もそらなる仇情。

あはでぬる夜は袖こそうれし
夢は枕のいとまなや。

螢まてく。
またぬかほたる
螢だまして文をよむ。

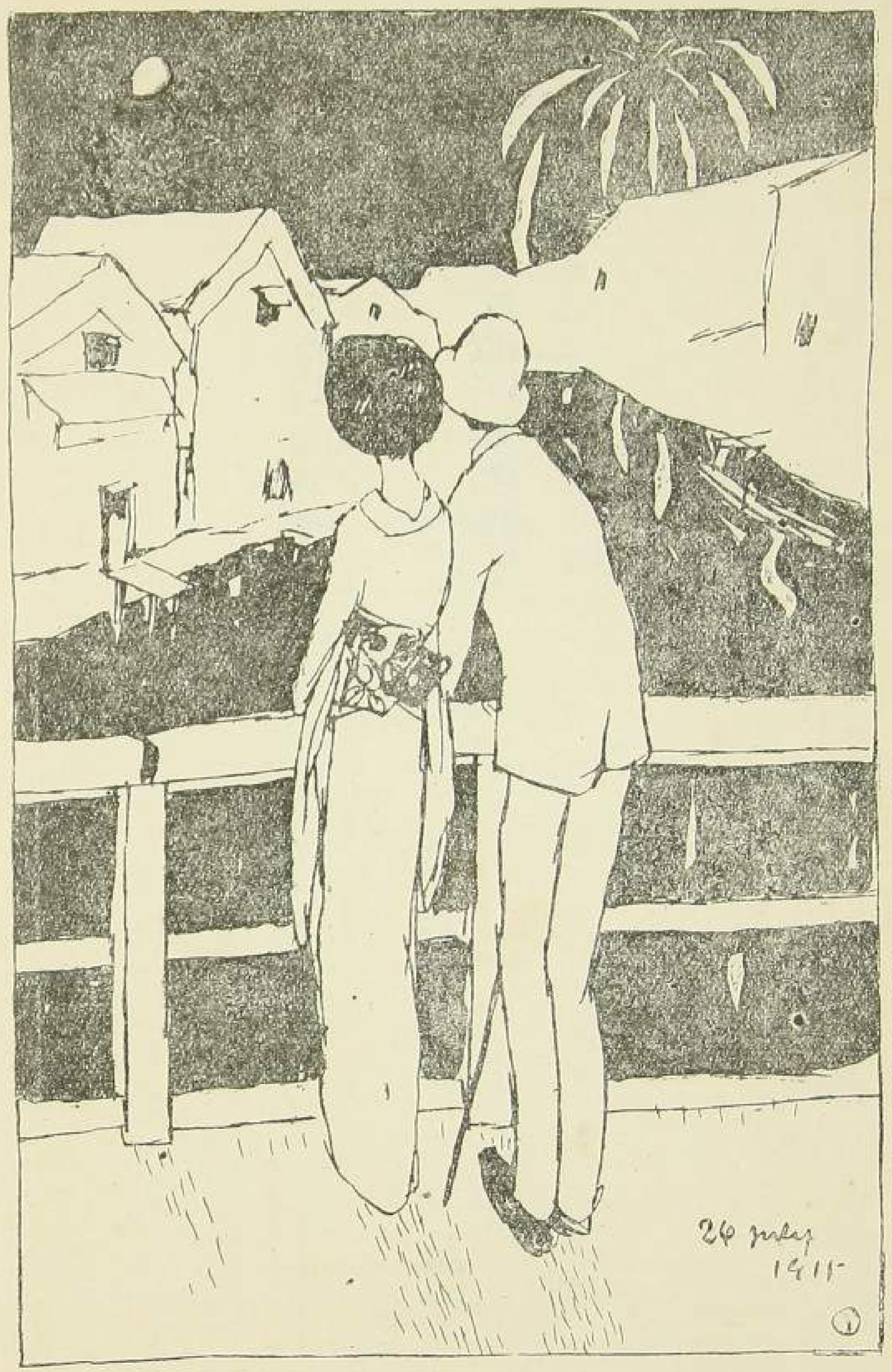
路とほく
行手はくらし聲をなみ
涙をのみてふりかへる。
なんとせうぞのいまは別れの。

まれにあひみし憂寢の床の
夢なさましそ　鐘の聲。
さましそゆめな
夢なさましそ　鐘の聲。

また逢はうずは
不慮で候
うどんげの花いまばかり。

逢ひはせぬかと橋までできたに
影も姿もみえはせず
橋の袂のこのしるべ石
なんとかいたら逢へるやら。

（江戸名所一石橋風景）



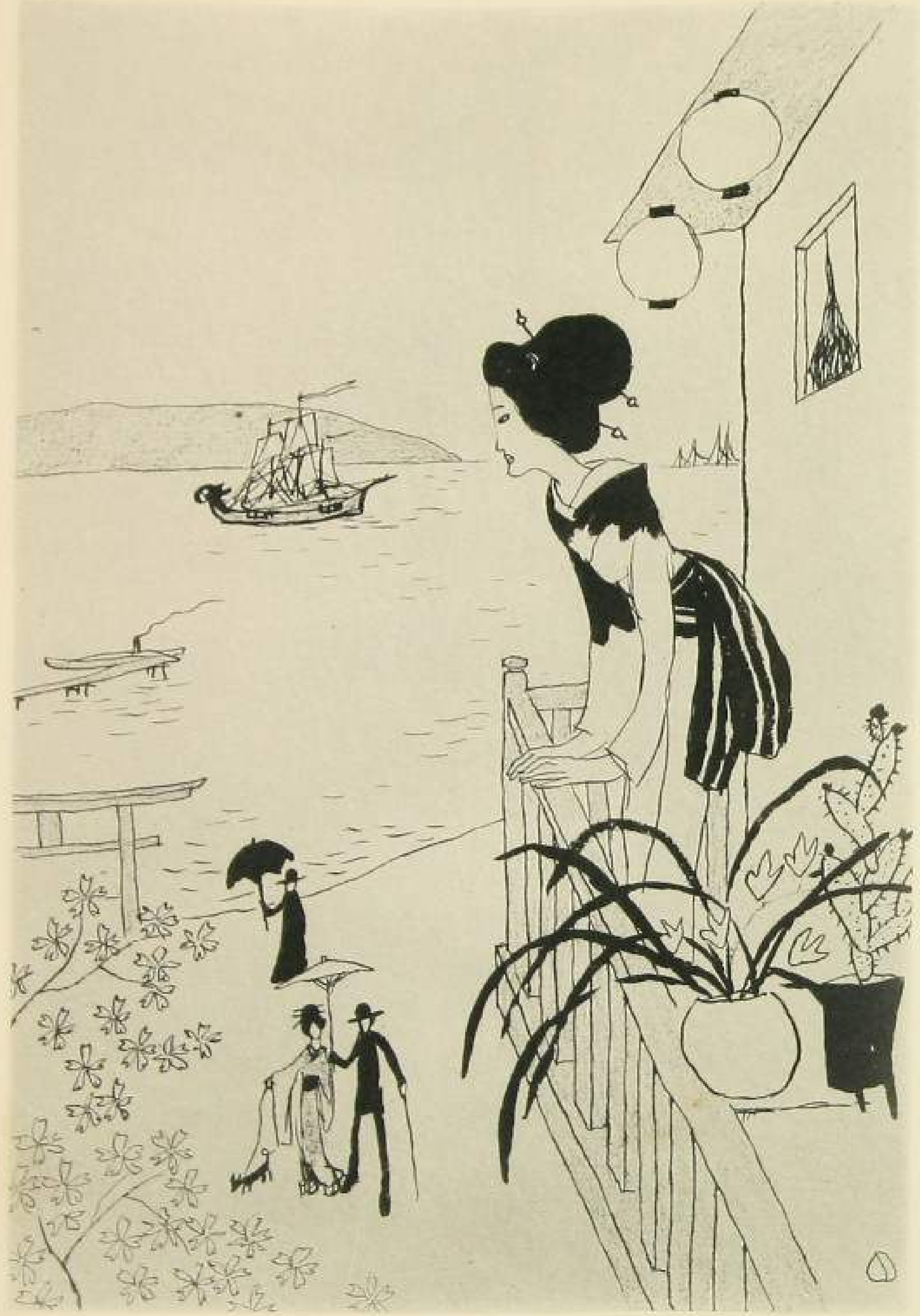
與作おもへばてる日もくもる
關の小萬が涙雨。

舞姫おもへばてる日もくもる
縮緬の小褄が扱帯。

君かや闇にはとひもこで
月にはあらはれて
なき名のたつに。

宵は月にもまぎれてすむが
ふくる鐘にはさんざ袖しぼる。
よしなのおもひ。

すめば浮世におもひのますに
月といらばや
山の端に。



こがれ〳〵て唐船の
袖に湊の宵々は
それや逢ふ夜は
袖に湊の夜ばかり。
はうろうすをれえらんす
さんたまりや。

くもらばくもれ箱根山
はれたとて
お江戸がみえるぢやあるまいし。

その人もないてわかれた
この人もないてわかれる夏柳。
春もいつしかくれて候。

あまりあつさに門まででたりや
寺の若衆にひきとめられて
のきやれはなしやれ帯きらしやんな
帯のきれたはむすびもなるが
縁のきれたはむすばれぬ。
しよんがえ。

こいといふたとて
ゆかるゝ道か。
船は四十四里
夜は一夜。

くるか〱と川下みれば
河原蓬の影ばかり。

初夜かとおもふたに
あらうや
わかれのむつぢやもの。

文やりて
きたらばだいてねようずもの
小褄あはせて片褄うちしき
うらみ〱もねようずもの。

濱の眞砂に文かけば
また浪のきてけしゆきぬ。
けふもあはずにかへるのか。

おもふこと　かなはねばこそ浮世とは
よくあきらめた無理なこと
神や佛が嘘つくならば
ほれた證據をどうかこかいな
むりな言譯する墨の
ぼからしいほどいとしゆてならぬ。

かねて手管とわしやしりながら
くどき上手につひほだされて
だまされてさく室の梅。

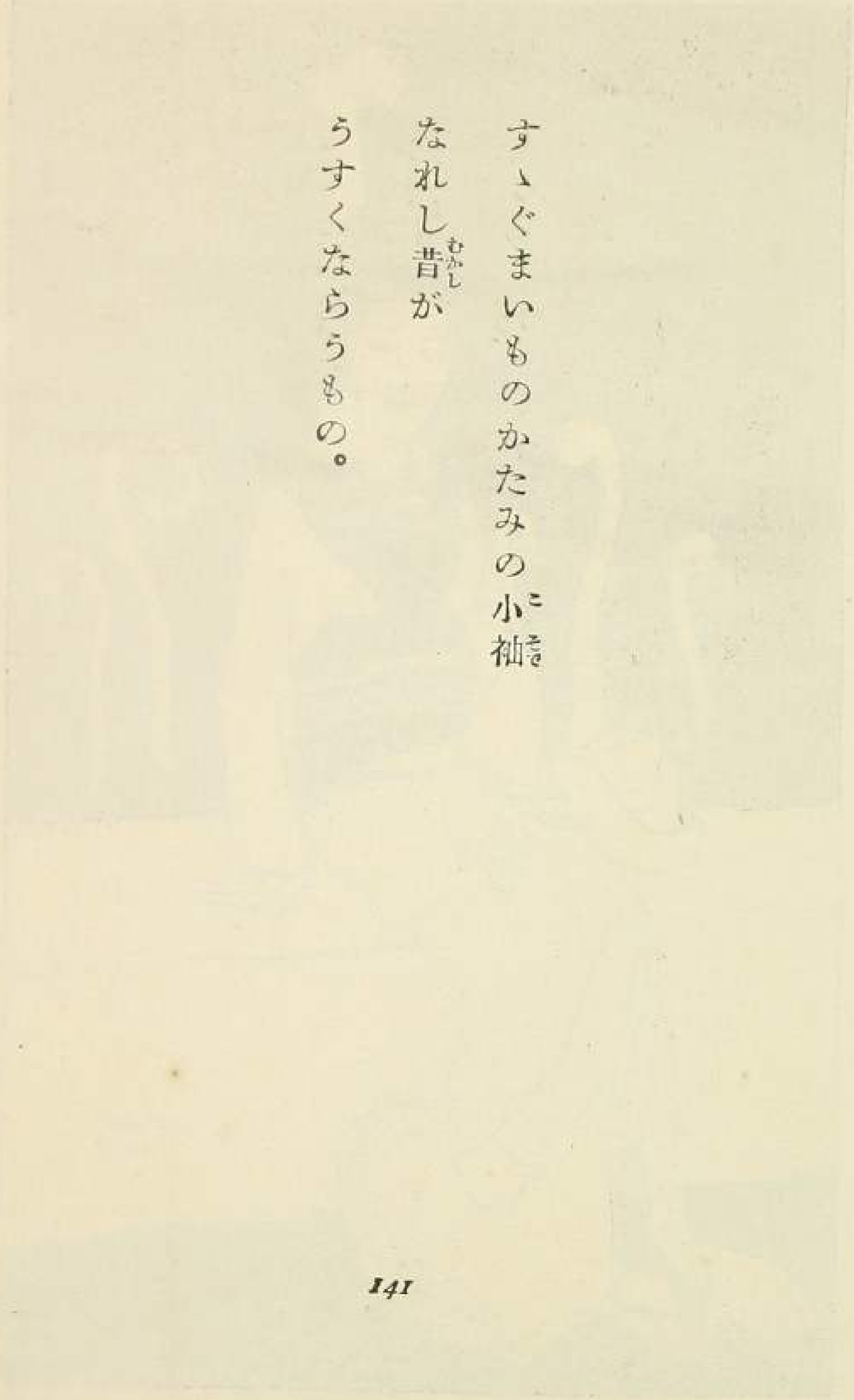
かはゆらしい前髪(まへがみ)を
あいそもこそもこつそり様(さま)に
しやうこともなきうきふしの
こゝばつかりに日(ひ)はてるまいし。

鐘がなるかや撞木がなるか
鐘と撞木のあひがなる。

磯の濱松ねいろとすれど
きては小浪がゆりおこす。

ないてくれるな
可愛いの駒よ。
今宵忍ぶは
戀ぢやない。

ほんにおもへば昨日今日
月日のたつもうはの空
人のそしりも世の義理も
おもはぬ戀の三瀬川
あはぬその日は氣にかゝる
あへば口說のたねとなる
にくらしいほどかはゆうて
えゝわしがな思はなんぢやゝら。



すゝぐまいものかたみの小袖
なれし昔が
うすくならうもの。

夕方(ゆふがた)かけてこひしさつらさ
いつにおろかはなけれども。

のぼりくだりのおつゞら馬よ
さても見事な手綱染かよなあ
馬士衆のくせか高聲で
鈴をたよりに小室節
坂はてる〳〵鈴鹿はくもる
あひの土山　雨がふる。

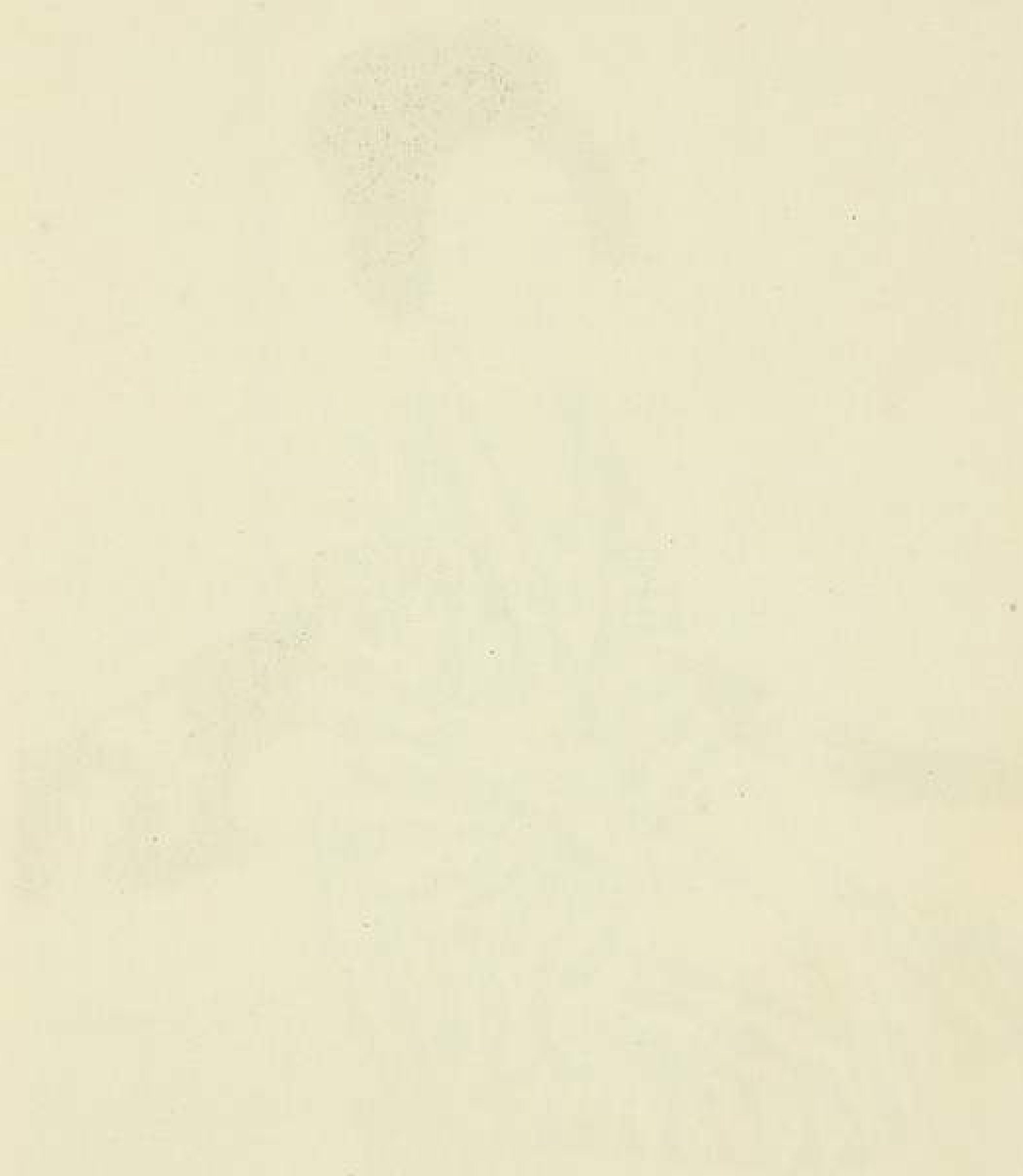
わがものと
おもへばかろき傘の雪
戀の重荷を肩にかけ
妹がりゆけば冬の夜の
川風さむく千鳥なく
まつ身につらき置炬燵
ほんにやるせがないわいな。

はてな由良さん手のなるはうへ
とらまへしやんせ酒にせう。
藝者太夫に手をひかれ
おもはず九太夫にいだきつき
てもそゝうな由良さんぢや。

山雀が
山がういとて里へでゝ
里でさゝれて
山戀し。

夏瘦とこたへて
あとは涙かな。
花は花ゆゑ香もさびし
花がなかうがなくまいが
なんのその葉がしるものぞ。

かゝる山谷の草深けれど
君が住家とおもへばよしや
玉の臺もおろかでござる
よそのみる眼もいとはぬわしぢやに
お笑ひやるな名のたつに。



沖の鷗に汐時きけば
わたしやたつ鳥
波にきけ。

夜の雨

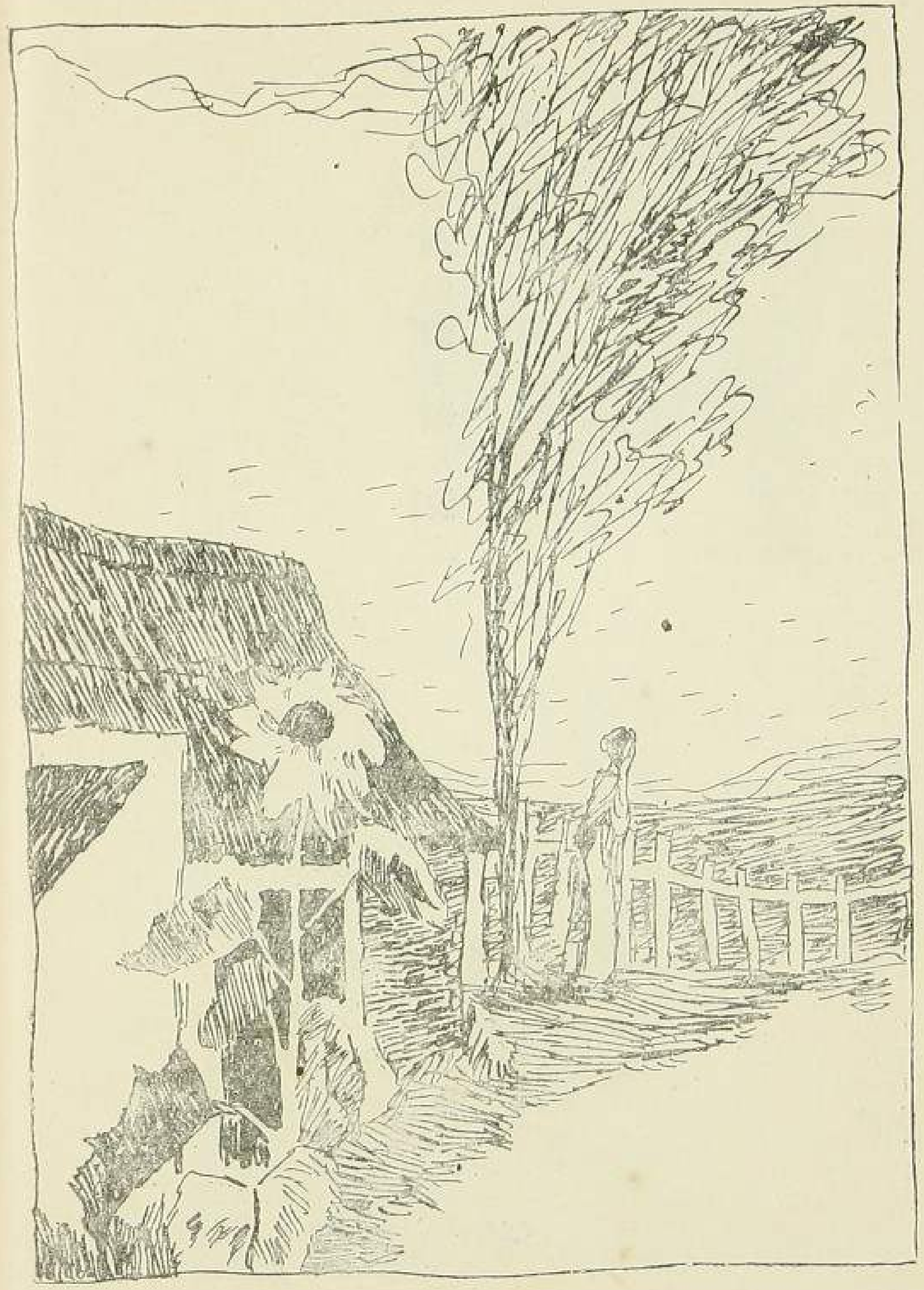
もしやくるかと疊算
紙で蛙のまじなひも
蟲がしらせて燈火の
丁子もとんだ今時分
きまぐれしやんす
えゝ　ぬしの聲。

あひはせなんだか
遠州灘で
二本マストの紀州丸。

あひはせなんだか
遠州灘で
二本マストの紀州丸。

沖の瀬の瀬の瀬の瀬の浪は
可愛い男の肚胸だめし。

きみひとり
いなしかねたるくゞり門(もん)
指(ゆび)にのこりし芥子(けし)の花(はな)
とつおいつして蟲(むし)をきく。



きぬ〴〵の
わかれに空も雨さそふ
蟬と螢をはかりにかけて
ないてわかれよかこがれてのきよか
あゝ昔おもへばみずしらず。

心細さにでゝ山みれば
雲のかゝらぬ山はない。

あのひとはどうしたと
ひとにきかれたら
死んでしまつたと
笑つてゐませう。

後影をみんとおもへば
霧がなう
朝霧が。

船ぢやさむかろきてゆかしやんせ
わしが部屋着のこの小袖。

こんどござらばもてきてたもれ
ぎふの御山(みやま)の梛(なぎ)の葉(は)を
浮世(うきよ)がゝりの思葉(おもひは)を。

我妹子と
一夜肌ふれ
あいぞ過せしより
鳥もとらず。
鳥もとられず。

ひや　ふや　お駒さん
煙草のけむりは
文八つあん。

よしなのわれらがひとりねや
かばかりさむき冬の夜に
衣うすくて夜はながし
たのめしひとはまてどこず。

香にまよふ。梅が軒端の匂ひ鳥、花に
逢瀬をまつ年の、あけてうれしき懸想
文、ひらく初音もはづかしく、まだと
けかぬる薄氷、雪におもひも深草の、
百夜もかよふ戀の闇、君が情の假寝の
床の、枕かたしき夜もすがら。

星があはふがあふまいが
そなたにかはりはないものを。
心も身をもなげだした
この辻占の賽の目に
丁とでたらばなんとする。

庭の夏草
しげらばしげれ
道あればとてとふ人もなし。

泣けといはれて山郭公
闇にうつかりなかれもせぬが
なくなといはれりやなほせきあげて
なかずにゐられぬ川千鳥
涙ひとつがまゝならぬ。

三十五反の帆をまきあげて
ゆくよ仙臺
石の卷。

秋の野にでゝ七草みれば
さあやれ、露で小褄がみなぬれる
さあよ、よしてもくんねえ鬼薊。

柳々で世をおもしろう、うけてくらすが命の藥、梅にしたがひ櫻になびく、その日〳〵の風次第、嘘も誠も義理もなし、はじめは粋におもへども、日ましにほれてつひ愚痴になり、晝寢の床のうきおもひ、どうした拍子の瓢簞やら、仇腹のたつことぢやえ。

ちればおしかろさかねばちらぬ
さこかちろかの花の闇
鐘につく〳〵わしやかんがへた
おなじことならねてさかぬ。

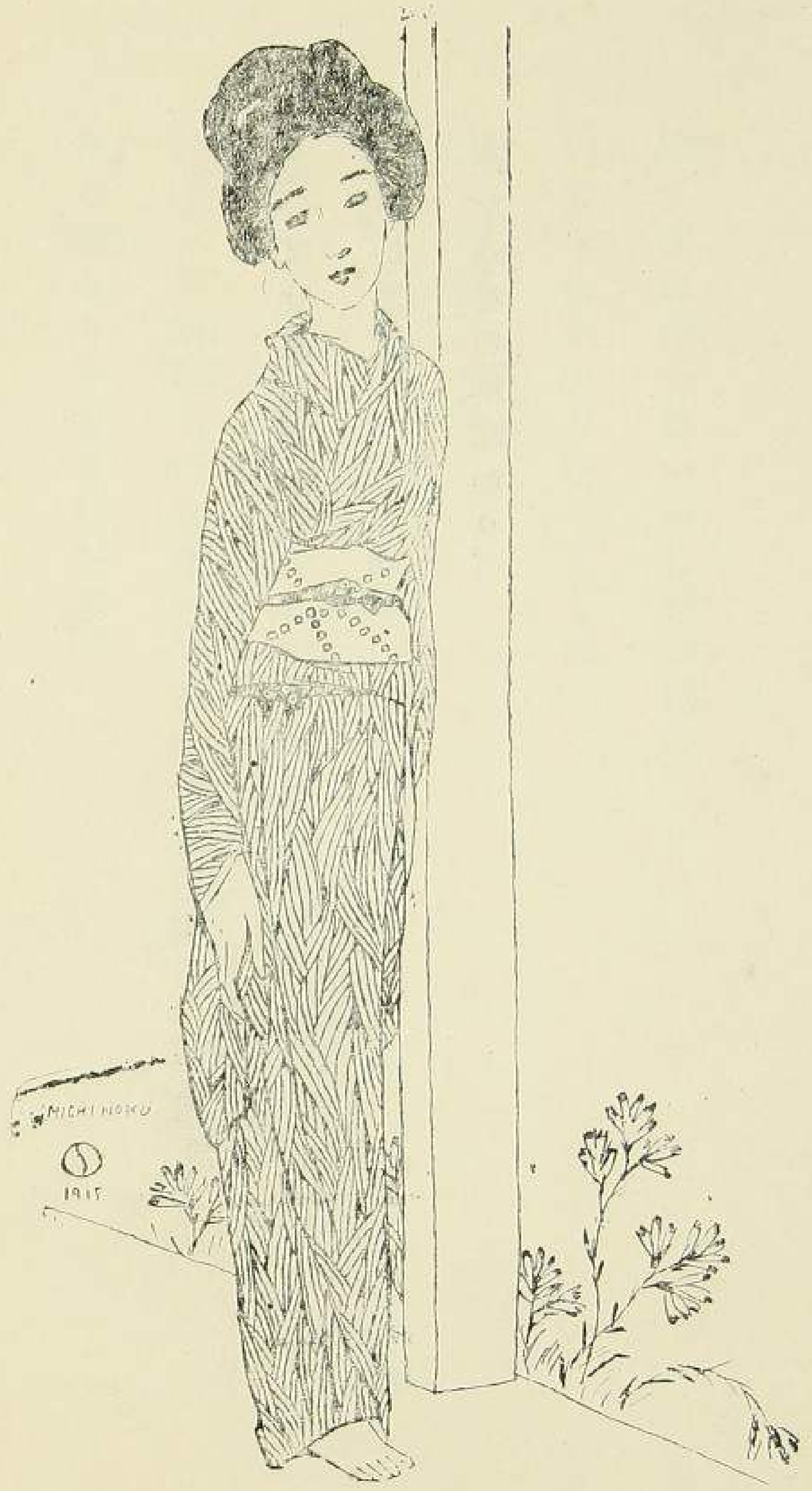
秋の夜は
ながいものとはまんまるな
月みぬひとの心かも
ふけてまてどもこぬ人の
おとづるものは鐘ばかり
かぞふる指のおきつねつ
わしやてらされてゐるわいな。

幾夜かぬしに淡路の島田髷
波の枕にねみだれて
ないて明石の浦千鳥
せめて夢路にかよへかし。

君こずば閨へはいらじ柴の戸の
いでゝはかへりかへりては
縁の橋場の遠砧
もてくる風のおとづれに
のぞいてみれば　われよりほかに影ぞなき
君はいま駒形あたりないてあかせよ山時鳥
月の顔みりやおもひだす。

あひはせなんだか
淀川がよひ
みたは堤の草ばかり。

あへばかごともわすれつゝ
ようてわらうてこともなう。
わかれてくれればまたしても
ふさぎの蟲のふさぎいづ。
灯ともし頃をなんとせう。



ゆく水に數かくよりもはかなきは
おもはぬ人をおもふこと
今はわが身に愛憎もこそも
月夜の烏、ねてもねられぬわしひとり
たとへどうした憂目にあをと
なんの意見もきこかいな
袖もかわかぬ涙の雨
はれぬ思をかはゆがらんせ、たのむ神々。

風が戸たゝけや
うつゝであけて
月にはづかしわが姿。

敵とみるならびやくらいきる氣
敵ぢやないもの
君ぢやもの君ぢやもの。

かはいゝそなたはどうしてゐやる。
　靄が軒端にかゝる頃
二階座敷の灯にそむき
むりにふくんだ盃に
涙がちるとたれがしろ。

かはいゝそなたはどうしてゐやる。
　冬の夕日の暮れる時
金の屛風の灯のまへに
舞の袂の文殼の
おもい心をたれがしろ。

紫色のちりめんの
おもたさなよさ春はゆく。
今宵はじめてとる褄の
はかなさなよさ春はゆく。

（ある年の十一月四日）

大正四年九月六日印刷
大正四年九月十日發行

（定價金九拾五錢）

著作者　竹久夢二

發行者　佐藤義亮
東京市牛込區矢來町三番地中の丸五十八號

三味線草

發行所　東京市牛込區矢來町三番地
新潮社
電話（番町）二二二三番
振替（東京）一七四二番

印刷者　東京市神田區宮本町五番地
高橋治一

竹久夢二氏装畫——濃艶無比の美本

□情話新集

□定價參拾五錢
□送料六錢

第一□舞鶴心中……近松秋江作
第二□舞妓姿……長田幹彦作
第三□小さん金五郎……田村俊子作
第四□小夜ちどり……長田幹彦作
第五□戀ごゝろ……田山花袋作

□新潮社出版□